



3歳ごろの将大さんと曾祖父の松一さん。将大さんはこの写真を肌身離さず持っている。

た。そんな彼の親代わりになってくれたのが曾祖父の松一（まついち）さんだった。ご飯を食べるのも風呂に入るのも、寝るのも一緒だった。小学校の野球チームで初めてもらった背番号付きのユニフォームが嬉しくて、毎日、朝晩袖を通して松一さんに見せた。松一さんは微笑んで、「頑張れよ。試合見に行くよ」と言ってくれた。そんな5月のある日のことだった。5月とはいえまだ寒く、松一さんは学校から帰ってくるひ孫たちのために炭に火をつけ、掘りごたつの中の火鉢に入れた。誤って火鉢がゴロンと転がった。高齢の松一さんは火鉢を直そうとごたつの中に入った。異変に気づいた父がバケツ一つで火を消した。家の被害は最小限に食い止められたが、松一さんはそのまま焼け死んでしまった。葬式の後、酒を酌み交わし談笑する大人たちの横で将大さんは泣き続けた。「人はいつでも死ぬ。」いつかじゃない。だから後悔しない

ように生きなければ。9歳の将大さんは誓った。しかし、彼は後悔の多い人生を歩むことになる。

田舎の小さな町では、ダウン症の姉が目立った。当時はまだ理解もケアも十分とはいえず、将大さんは姉のことを馬鹿にされ、いじめられた。姉の世話に忙しく構ってもらえない怒りも相まって、母の胸ぐらを掴んで「普通の姉ちゃんがかつた！」と叫んだ。それから、将大さんの野球の試合があるときには、母は姉を連れて隠れるようにして見に来るようになった。数年後、姉が就業先のイベントで他のダウン症の子どもたちと踊っているのを見て将大さんはハッとされた。その姿はパワフルで、純粹で、のびのびとしていた。「一緒に踊ろう」と手を伸ばされ、「僕はなんて最低なことをしたんだ」と後悔した。その日から姉に優しく接することができるようになり、二人で出かけることも増えた。

高校は甲子園常連高に進学し、



1.お客さんからは「エグちゃん」という愛称で親しまれている将大さん。人気音楽グループEXILEのメンバーにいそな見た目のため。2.将大さんが生まれ育った若手県一関市東山地区。3.夜は火を起こして暖をとりながら選別・箱詰め作業をすることも。

小学校の帰り、いつものように友達と歩いていると消防車や救急車が慌ただしくサイレンを鳴らして走っていった。「どこかで火事でもあったのかな？」と不思議に思っていると、ただならぬ形相をした母が軽トラックでやってきた。助手席に僕を乗せると、母は一言も喋らずアクセルを踏んだ。火が出たのは僕の家だった。燃えたのは家とひい爺さんだった。

人はいつでも死ぬ

岩手県一関市東山、急峻な山道の上に佐藤将大（まさひろ）さん（34）の実家がある。少なくとも300年は建っているという立派なお屋敷には曾祖父父母を含む4世代が一つ屋根の下に暮らしていた。屋敷の横には牛舎があり、父は酪農を営んでいた。将大さんは5人兄弟の3番目として生まれた。姉はダウン症で、一つ年下の弟たちが双子だったこともあり、母の手はとも将大さんまで回らなかつ